

地域委員会委員長の高橋です。地域委員会って、いったい何する委員会・・・？ってよくいわれます。実は、本府協会と府内の各市サッカー連盟との橋渡しを行いながら、協会の活性化を目指すのが主たる業務です。残念ながら、その具体的な取り組みはあまり認知されていません。年度末には各市連盟代表が競う協会杯を開催していますが、全試合芝生の会場を確保しているも参加数は減少つづけています。これは社会人登録チーム数の減少と比例しています。協会杯への参加減少の要因は、①協会登録チームしか参加資格がない。②協会登録費用の負担が選手にとって重い。③各市連盟の事業が充実してきている。④少子高齢化の影響 等です。今後これらの課題解決にむけて、本 HP を通じて提案していきたいと思っています。

「ローマは一日にしてならず」

各府県協会の活動が活発かどうかのバロメーターは、一つには独創的な地域固有のソフト事業の展開案を持っているか、また一つには経年による登録チーム数がどのように推移しているかです。前者についての評価は、成果との関係もあり一定の判定スパンが必要ですが、後者の評価は簡単に数字に表れてきます。本府協会の場合、社会人連盟の努力とは別に、リーグが発足後のチームをピークに、2009 年はチームへとその登録チーム数は約 62 ポイントも減少しています。その傾向は、本年 4 月堺 N T C がオープンしたにも関わらず歯止めはかかっています。全国社会人の登録数もピーク時から約 20 ポイント下落していますが、本府協会の下落率は深刻です。これまでの調査でグラウンド不足が登録数減少の一因と指摘されてきましたが、どこに立地しているか、つまり一箇所集中型か地域分散型かも重要要件といえます。とはいえグラウンド建設は自治体の理解のもと、広大な用地と巨額の経費がかかります。まずは、インフラ整備の整った「堺 N T C」をいかにサッカーマンへ周知徹底するかが、最大課題であることに異論ないところです。一方、2007 年及び 2009 年に府下市町村連盟に調査をかけたところ市町村登録チーム数は上記ほどの大きな減少は見られない、という傾向が出ています。日々サッカーを楽しまれている潜在的なサッカーメイトが、たくさんおられる事実を見逃してはなりません。私たち地域委員会の使命は、本府協会の未登録サッカーメイトに活躍の場を提供しつつ、活動を共にすることです。一つのサッカーボールを追いかける熱き心は、どこにいても相通ずるものがあり、愛するサッカーのより大きなうねりを造るためには、一つにならなければなりません。地道な取り組みが必要です。

「すべての道はローマに通ず」

市町村のサッカー連盟は、これまで各市町村教育委員会における市民スポーツの振興という名目で、行政主導のもと組織化されてきました。社会教育法を準拠してきた経緯があり、今日においてもその形態はあまり変わりません。行政の関わりが大きい市町村では、大会の参加費は無料、会場は学校グラウンドの割当て使用など、いわゆる公によるまるがかえ運営です。また、それらの時を経ながら自主的活動を強く求める地域では、②体育協会の法人化（サッカー連盟は構成団体）などに取り組み、参加費なども一部受益者負担の考

え方が導入されてきました。一方、すでに本府サッカー協会では、③社団法人としての自己決定・自己責任を伴った自主運営をしています。このように府下におけるサッカー活動の組織形態は、本府協会を含め3つのパターンがあります。これらのことを理解した上で、未登録サッカーメイトの登録化への方策が必要です。11月末に開催した地域委員会会議で、次の点の確認を行いました。ホームページの充実をはかり、市町村連盟との情報交流を強化させる。協会杯は、市町村連盟において一定条件を満たせば参加資格を有する。本府協会の各種イベントを通じて、生涯スポーツ及び競技スポーツの両方の性格を併せ持つ、スケールの大きなサッカーの楽しさを、“来て、見て、知ってもらうこと”の機会を提供することが何よりも重要だと言えます。すべてのサッカーメイトによる本府協会登録への動きが、ひいては日本協会への強い示威行動になることは間違いないでしょう。

「繁栄から創造へ」

日本のサッカーは、Jリーグの開幕した1993年より今日まで世界でも類まれなる発展を遂げてきました。オリンピックに出場するのもままならなかった国が、いきなり4大会連続ワールドカップに出場できるチームレベルになりました。2002年にはワールドカップを開催し、見事成功させたことにより、選手の技術力と協会の組織・運営力を世界に強くアピールしてきたのです。南アフリカ大会では、目標をベスト4と明確に置き日本の当面の到達点が誰にもわかりやすくしたことで、サッカーを国民的なスポーツへと導いたといえます。そして、2022年のワールドカップ単独開催への大きな弾みにしようと、梅田キタヤードにおける8万人収容のエコスタジアム構想など懸命に取り組んでいる姿勢は、FIFAからも高い評価を受けることでしょう。日本サッカーの繁栄を期待して止まない所以があります。ここで本府協会の地域委員会という限定した視点からこれまでの日本協会の取り組みを見てみましょう。2010年度JFA大阪府訪問会議で、プレジデント・ミッションとして8年間に亘って続けられてきた、PHQ支援制度の見直しを来年度2011年度より始めるという説明がありました。また、支援制度の評価として「市町村協会（連盟）との連携強化」については、一定の成果があったとの報告も受けました。今後は更なる府県協会との連携を強化するため、事業毎の補助から一括交付金化に制度変更されます。まさに、「権限と財源」を移しましょうということです。これは「ひも付き」から「まる投げ」へ、ではなく、「集権」から「分権」への脱皮です。府県協会自ら執行にあたってその責任を負うことは、つまり強い自立化であり、本家としての日本協会は、ますます繁栄の勢いが加速すると思います。一方、分権（交付金化）の確立には、分家としての府県協会の繁栄ビジョンがなければ、完全に失速します。本府協会では、市町村協会（連盟）との強化の成果を出したとはいえませんが、これまでの支援はそれらを意識するには十分な有難い制度でした。これからの日本のサッカーは、軌道を進めば繁栄する時代は去り、世界のベスト4に向かって本家も分家も創造期を迎えたこととなります。

「混迷」

地域委員会の使命は、これまでも述べてきましたが市町村連盟と本府協会との垣根を取

り払い、サッカーファミリー（メイト）としての連携に尽きます。そのためには日本のスポーツについて再度整理しておく必要があります。スポーツ活動は、①学校体育としてのスポーツ（いわゆる部活動）②大学・企業スポーツ③地域スポーツなどがあり、それぞれ存立根拠に違いがあります。この三つの形態ですが、まず①は、教育の一環として児童・生徒の運動を通じて、心身の健やかな成長をねらい、学校教育関連法などを根拠として府県または市町村の教育委員会が所管しています。そして、②は、（トップ）競技者として選手の育成を重視した大学や彼らを通じて企業の広報部門を担うとか、社員への厚生事業としての役割であったりします。また③は、豊かな生活を送るための手段としてのスポーツ、これは社会教育の範疇になりますが、同好の仲間が集まるサークルいわゆるクラブ活動です。①や②に比較して後年度になって定着したのですが、多くのサッカーチームが地域スポーツ型に移行してきています。これらにはそれぞれに魅力があります。①は、グラウンド所有と多数の指導者の存在です。②は、何と言っても活動場所と資金の提供を享受できること。③では、年齢や職業などの縛りもなく活動できること。もちろん①②③が、実質的に一つになれば素晴らしいに違いないですが、条件整備など課題が山積しています。総合型地域スポーツクラブの取り組みもまだまだ定着していない中、日本のサッカー界が世界に立ち向うためには、知恵と工夫と決断以外にもスポーツ界の大枠の仕組みも変えなければなりません。「私見」スポーツ界における大枠の条件整備ですが、次の対策が先ず必要だと思います。スポーツ省を設置して法体系を整理すること。全国津々浦々に存在する公立学校のスポーツ施設の完全開放を実施する。具体には、時間外は学校の管理下を外し、指定管理者をおいてスポーツ施設として経営する。（部活動は指定校とする。）企業が地域へスポーツ活動を支援した場合、「スポーツ&ヘルス支援企業」として減税措置を図る。

「検証」

これまで地域委員会として若干枠を超えたところがありましたので、再び本題に立ち返って検証いたします。以下は、府内の北部に位置する、某市サッカー連盟の場合です。当該連盟の主な活動ですが、一年間を大きく次の3つの事業に分けて実施されています。

I 事業 市内チーム限定のリーグ戦やトーナメント大会及びサッカー教室や審判講習会などを開催

II 事業 市外及び他府県を含む招待大会の開催及び遠征など

III 事業 府あるいは関西協会主催事業への会場斡旋などの支援

それぞれ事業には、しっかりしたコンセプトがあります。特筆すべきは、ジュニアユースやジュニアたちの希望者によるオーストラリアやイングランドへの海外遠征です。もちろん全額個人負担です。今日までの活発な活動により、各種別で府代表として全国大会へ幾度となく出場、20数名に上るJリーガーをも輩出されてきました。次に、本府協会の登録状況をみてみましょう。種別ごとの市連盟登録チーム数と府協会登録チーム数の比較です。種別市連盟登録数府協会登録数加盟比率%シニア・社会人高校・ユース中学・ジュ

ニアユースジュニア女子全体で加盟比率は約 55%ですが、シニア・社会人を除くと 100% となっています。一方、シニア・社会人の登録比率は、51 ですから 10%を切っているわけです。ここに、サッカーファミリー（メイト）の課題が潜んでいます。一般的に、高校生年代で練習など厳しく追い込まれた選手は、燃え尽き症候群になって競技から離れるといわれますが、当該連盟においては、市内社会人の大会に参加するなど何らかの形で継続されています。最近フットサルに親しむ若い人が増え、ますます隆盛になってきています。行政の協力があることも見逃せません。市内には 3 面の芝生でサッカーできる施設があります。これは 10 数年前の国体会場の芝生を張替えなど施し、継続して育成しているからです。よく国体終了後の施設のあり方が問題になっていますが、競技団体と行政の取り組みによる成功事例ではないでしょうか。サッカーを芝生グラウンドでプレーすることは普通になっています。さて、上記のようなシニア・社会人チームを本府協会へ誘導することは、容易なことではありません。要はチーム・選手たちに登録の必要性が迫っているかどうかです。本府協会として、参加登録チーム数の下落を止めるには、対処療法ではなく先ず協働事業に取り組み互いの風通しをよくし、更にシステムについても抜本的な変更を余儀なくされているのではないのでしょうか。今年度、地域委員会では次の点を確認したところです。ホームページの充実をはかり、市町村連盟との情報交流を強化させる。協会杯は、市町村連盟において一定条件を満たせば参加資格を有する。

「検証－2」

府内の北部に位置する、某市サッカー連盟の場合の事例－2です。

先に当該連盟は、イングランド遠征を連盟の独自事業として実施している、と述べた。私は、機会があつて、2011 年春、U14 歳及びU11 歳の同遠征に同行することが出来たので簡単に報告します。

総勢 54 名という大部隊の壮大な遠征であつた。10 日間の日程で、①マンチェスターシティFCのコーチによる指導、②リバプール市選抜、③マンチェスターユナイテッドFC、④エバートンFC、⑤ハイバーニアンFC、⑥セルティックFC、などとのゲームがメイクされた遠征である。個々のチーム解説は不要であらう。

プレミアリーグ、スコティッシュ・プレミアリーグとのゲームは、まさに選手たちにとって、毎日がドリームであつたに違いない。なにより私自身、グラウンドに入ったとたんに、自分の立場がわからなくなる衝動に駆られてしまったことを思い出す。ともあれ、参加した U14 歳及び U11 歳の選手たち並びに指導者達は、これまでの自らのサッカー感を最高の形でチェックできたことであらう。

【雑感】

その 1) ルールブック重視の日本とピッチ重視のイングランド

①「ボールの空気圧」

日本では規定の空気圧のボール（非常に硬い）で、カチカチのグラウンドで練習して

いる。一方、マンチェスターシティのコーチ曰く、練習時は圧を下げバウンドを抑え、ボールコントロールへのストレスを省いてやるのが重要、空気圧を守る意味はないという。結果、芝生の上でやるから完全にローバウンドでの練習となり、ドリブル・パス始め戦術理解に集中できる。

②「審判の数」

三人でなく一人審判のゲームがあり、当然こちらは不満と不安が交錯し落ち着かない。しかし、相手ベンチと選手は、アウトボールの判断や微妙なオフサイドの判定があってもいちいち文句をつけないし、プレーを止めることは全くない。つまりプレーヤーもベンチもレフリー化せず、ボールやラインがどうかというより大局的な流れを重視していた。

その2) これからがスタート

本遠征ではU14の活躍が目覚しかった。彼らも実感していると思うし、それ自体素晴らしいに違いないが、それだけで今後トッププレーヤーとしての補償がなされたものでもないことも自覚して欲しい。今のスタートラインを生かして、一層の精励を期待し、大きく成長してもらいたいと願うばかりである。

その3) 勝敗こそがサッカー

ホイッスルがすべてを支配する。キックオフのホイッスルは、記念撮影などのフレンジリーな交流を引き裂き、一気に襲いかかる戦術に勝ちへのこだわりを感じた。U11は、あっという間に押さえ込まれ、立ち戻る猶予は最後までもらえなかった。しかし、終了のホイッスルでは、また元の穏やかさが相手プレーヤーにはあり、サッカーがスポーツたる所以であるといえる。

その4) 一貫指導

予定どおりそれぞれのカテゴリーで計5試合できた。対戦チームに共通していたのは、チーム戦術がU11もU14も変わらないということ。これはトップチームの戦術をそのまま下部組織にもあてはめていると思われる。一方、市・連盟は連動していなかったのでU11とU14のプレーヤーとチーム課題がぼやけてしまった。早急に技術部の設置と少なくとも選抜チームには指導の一貫性が求められる。

さて、我々はサッカー文化を長年育んできたイングランドやスコットランドのことも知らなければならない。まず、宿舎のリーだが、マンチェスターとリバプールの間位置する小さなまちであった。移動するバスの車窓からは、緑に包まれた丘陵地がどこまでも続き牧歌的でもあり、ゆったりとした時が流れていた。また、街も中世と近世の建物が混在しているようで、近代的な建築物はほとんど目にしなかった。それらの光景からは、あの激しいサッカーを展開するような勢いを感じなかった。しかし、サッカー発祥の地として、他国の追随を許さない頑なまでのこだわりがそこには存在するのかも知れない。

まさにサッカー母国としての歴史を感じるわけだが、当該市サッカー連盟も本遠征を通

じて、新たな歴史を築いたことに違いはない。少しくどいが本事業は、日本代表でなく、また府県代表でもない、単なる市の選抜チームの遠征であることを念頭においていただきたい。本府協会として市町村連盟の巻き込み方を再度工夫する必要がある。

「実態調査－１」

本府協会への登録チームの減少は、社会人連盟及び地域委員会の大きな課題である。この件については、協会としてこれまでも取り組んできたところだが、具体的な解決策が発表できないまま、つまり未解決案件として継続されてきた。

2005年に各市サッカー連盟の社会人登録チーム数と協会登録数の調査をしたが、本年（2011年8月）改めて同様の実態調査を実施した。

*注 一部の市連盟とは未確認。また大阪市は協会登録数をスライド。

2011年市町村登録社会人チーム実態調査表

2011.8.31

	市町村名	協会登録 2011年	協会登録 2005年	市登録数 2011年	市登録数 2005年
豊能地区	豊中市	12	—	20	25
	池田市			14	14
	箕面市			18	30
	豊能町			—	—
	能勢町			—	—
三島地区	吹田市	25	—	30	40
	高槻市			46	60
	茨木市			12	32
	摂津市			10	—
	島本町			—	—
北河内地区	守口市	15	—	16	18
	枚方市			40	—
	寝屋川市			10	16
	大東市			—	4
	門真市			40	30
	四条畷市			7	—
	交野市			1	3
中河内地	八尾市	10	—	登録なし	—
	柏原市			25	—

区	東大阪市			7	—
南河内地区	富田林市	10	—	10	—
	河内長野市			6	13
	松原市			6	—
	羽曳野市			10	30
	藤井寺市			—	—
	大阪狭山市			—	—
	太子町			—	—
	河南町			—	—
	千早赤阪村			—	—
泉北地区	堺市	15	—	46	40
	泉大津市			13	—
	和泉市			14	—
	高石市			19	3
	忠岡町			—	—
泉南地区	岸和田市	9	—	16	20
	貝塚市			14	20
	泉佐野市			9	9
	泉南市			—	—
	阪南市			—	—
	熊取町			—	—
	田尻町			—	—
岬町	—	—			
	大阪市	70	70 (仮)	70 (仮)	70 (仮)
	その他	5	5 (仮)	5 (仮)	5 (仮)
	計	171	266	534	485
	2005年比較	(△95)		(+49)	